

無駄なムダと無駄じゃないムダ

京都先端科学大学

川上 浩司

不便じゃなければ得られない益がある、という話をしています。そのような益を「不便益」と名付けたのは、私の師匠でもある片井修京都大学名誉教授です。一瞬、何を言っているのかなと思うけど、なんだかキャッチーで、ちょっと考える自分にも思い当たることがありそうで、しかしちゃんと考えようとするという意味深長な言葉です。師匠はそのような言葉やフレーズをいくつも作ってきましたが、その中の一つに「世の中、無駄なムダと無駄じゃないムダがあるんじゃない」というのがあります。

また何を言い出すのかなと、当時は思いました。論理的にも崩れています。数理論理学を得意とする師匠の言葉とも思えません。呪文とかおまじないの言葉ならば、リズム感があって良いかも知れません。ジュゲムジュゲムに似ていなくもありません。しかしこの言葉は、システム科学専攻に属する研究室の中で発せられたのです。不便益とほぼ同じ、前世紀末のことです。しばらくは真意がわからずに放置されていましたが、後々から考えると、我々弟子どもが「不便益があるのだ」と言っているのと同じこと

だと気づきました。

あれから四半世紀、私は不便益事例（不便の中に益があるモノやコト）の収集を続けています。その中には、意図的ではなく、図らずもユーザの不便がユーザに益を与えることになっていった事例や、意図的にあえてデザインに不便を取り入れてユーザに益を与える目論み（事例）もあります。後者の「意図的」な事例の中で特に示唆に富むものを、私が「勝手に不便益認定」して回っています。バリア・アリーとか、足漕ぎ車椅子とか、デコボコな幼稚園の庭とか、またいつか勝手に不便益認定したものを紹介したいと思います。

事例収集して気がついたのは、手間をかけたからこそ得られる益がたくさんあることです。益が得られるわけですから、

この時の手間は無駄ではありません。一方で、手間をかけても空回りして無駄に終わることもあります。その場合は不便益事例に含まれません。ところが通常、これらの区別を意識することなく、手間といえばムダだと深層心理では考えます。手間はいつでもネガティブな烙印が押され、無ければ無い方がいいなど考えます。

ここで、表題のフレーズの中の「ムダ」を「手間」と読み替えることを思いつきました。「世の中、無駄な手間と無駄じゃない手間があるんじゃない」とも当たり前前のことを言っています。どう見ても論理的に破綻している表題のフレーズは、手間と書いてムダと読む的私たちの深層心理を皮肉っているかのようです。「手間かけて丁寧な暮らし」のような優しくてライフスタイルを提案するよう

なスローガンではなく、新しいモノゴトを作り出すクリエイターに向けた、皮肉込みの無骨なスローガンでした。

あれから四半世紀といえは、近頃は無駄なものを作って世に問う藤原麻里奈さんという方を、よく新聞やテレビで目にします。イヤホンのケーブルを絡ませる装置とか、それを巨大化してもはやどのような機能（と言えるか？）があるかわからない装置とか、無駄な装置を作るには天才的な発想力です。二〇二二年十月一日の朝日新聞beに掲載のインタビュー記事には、これらの装置のほかに、オンライン飲み会緊急脱出マシーンと称して、ネット接続が悪い時にパソコンの画面に表示されるマークが回転する装置をパソコンのカメラの前に置いてみたり、札束で頬を叩かれるマシーンなどが紹介されています。

なにがしかの「益」を与えてくれるかも知れませんが、もしそうなら、不利益システム研究所としては彼女をデザイナーとして抜擢したいところです。ただ彼女は新聞記事で、「無駄を無駄じゃないと思うには…」と続けます。全ての無駄は無駄じゃないと言いたげに聞こえます。さらに彼女によれば、松下幸之助さんが「この世に存在するものは、無駄なものなど一つもない」と言ったそうです。

ここまで読んで、無駄なマシーンと不利益システムは、やっぱり違うものだと気がつきました。「全ての」とか「一つもない」というのはわかりやすい便利なフレーズです。ただし、「手間といえばムダ」と同根です。表面的には逆の方向を向いていますが、根っこでは「全ての、あまねく」を信奉するのが共通しています。一方で不利益は、「無駄など一切な

どうも新聞記事のように上手に書けないので、これらの装置がいかにおもしろいか、「ばっかだねwwww」とか言いながら目が離せなくなるか、皆さんには伝わらなくてもどかしいのですが、こういうときはウェブでキーワード検索してみてください。動画などで説明されると、ついついニヤついている自分に気がきます。これらの装置は、役に立たないという意味で、「無駄」です。それどころかイヤホンのケーブルを絡ませてくれる装置など、無駄を通り越して「邪魔」です。

彼女は新聞記事で、「無駄を無駄と思うのは、活かし方を知らないだけ」と言っています。少し、師匠の言葉に似ています。もしかして、不利益に近い考えの人かも知れません。彼女の「無駄」を通り越して「邪魔」な装置も、ユーザに

「役に立たないこと」であり、これを英訳すると uselessness です。また、反対語大辞典によると無駄の反対は「有用」[「有益」]であり、英訳すると usefulness です。ということは、有益な無駄は useful uselessness になります。これもこれで、キャッチーな言葉になりました。

ところで国語辞典によると、無駄とは「役に立たないこと」であり、これを英訳すると uselessness です。また、反対語大辞典によると無駄の反対は「有用」[「有益」]であり、英訳すると usefulness です。ということは、有益な無駄は useful uselessness になります。これもこれで、キャッチーな言葉になりました。

川上浩司（かわかみひろし）

一九六四年生まれ。京都大学工学部、同工学研究科修了。京都大学助教授・特定教授などを経て京都先端科学大学工学部教授。不利益の研究で学会論文賞・出版賞多数。著書に『不利益という発想』（二〇一七）など多数。